

鬚髯考

はし が き

昭和四十九年十二月二十三日、われら上代文学会が会長に戴き、師父ともあおいだ高木市之助先生をよみの国へお送りせねばならなかった。「リハビリテーションに励んでいます。もう心配はありません。御安心下さい。」というおたよりを拝見してわずか数日、先生御逝去の訃報を受けて、愕然色を喪ったのである。

初めて先生にお目にかかったのは、昭和二十年の冬であつたらうか。敗戦直後の混乱のさ中で、先生が教育に自信を失つたといわれて九大の教職を辞せられた直後であつた。それ以前は文通は時々あつたが、拜眉の機会には恵まれなかつたのである。それがはからずもお目にかかれたのは、鎌倉の由比浜に程近い島津久基先生のお宅をお訪ねした時のことであつた。その

市 村 宏

頃、私は先生のお仕事のお手伝をしていたので、鎌倉のお宅へもかなり足繁く通っていた。その足なのだが、私は復員兵の甥に貰った巨大な兵隊靴を履いていた。歩いていると脱げそうな感じで閉口したが、いいにも悪いにもそれ一しかないのだから、せめて紐をしつかりと締めてどうやら歩いていたのである。その日もこの貴重な靴をはいて鎌倉へ出かけたのだが、先生宅の玄関をあげると、なんと私と同じ兵隊靴が前向にそろえてあつて、どなたか先客があるらしいことが判つた。それでもいつものように、御免下さいと声をかけると、まず先生の愛犬スピッツが二階からかけおりて来、つづいて奥様がにこやかに迎え下さる。そして先客は高木先生であることが判つた。

二階の書齋へ通され、島津先生から紹介して頂き、かねがね文通はあつたので、旧知のようにお心やすく

話すことが出来たのはうれしかった。学問の話はちょっとも出ないで、今みて来られた東京秋葉原の闇市の話や、福岡県の漁師たちの、闇売りで儲けた十円札が積んで一尺に達すると豪奢な一尺祝をする話などがあとからあとから続いた。島津先生は低血圧の御病気があって外出をなさらなかったから、そんな世間話が大層おもしろそうで、のど仏がみえるほど大口をあいてお笑になる。高木先生は語ることに興じて次々と新しい話題を持出されてお飽きになる様子もない。私も高木先生が兵隊靴をはいておられたことに大に共鳴して、私のその靴の話をした。実は玄関で脱いで上る時にはじめて気が付いたのだが、家を出た時から右左をとり違えて履きながら、つい鎌倉まで心付かずに来てしまったのである。つまり巨大であるために、左右をとり違えてもただゆるいだけで、足が違うための異和感が全然なく、靴紐をぎりぎり巻き締めて脱落を防いでいたのである。しかもこの靴は先夜侵入した盗人に衣類などと一緒に持ち去られたのだが、この靴ばかりは近くのたんばに捨ててあり、隣人の報せで拾って帰った代物でもあった。盗人もあまりの巨大さに、自分でも履けず、売物にもならぬとあきらめて、折角盗み出しながら邪魔になって捨てていったものとみえる。

この実話は両先生を楽しませるに足るものがあって、座興はいよいよ盡きなかった。陽が傾いて高木先生は先へお帰りになったが、私は用談があるのであと残りした。仕事の合間合間に島津先生は高木先生との学生時代以来の長い交りのあれこれ思い出してはお話になった。島津先生は頭は五分刈、鬚もなかった。高木先生は銀白の髪を伸しておられたし、鼻下に小さな鬚があった。島津先生はいつもキチンとした感じであったが、高木先生はその昔はやったダンディという言葉があたるようなお方だが、その時は疲れた背広であった。いつもワイシャツはお着にならず、よい好みの色シャツを召していたのはよほど年をとられてからの印象である。この初対面の時には鬚をたくわえておられたと記憶しており、中西教授からこの追悼号に何か書くようにとお話があった時、突嗟に先生の鬚が目につく、鬚髯考という題目まで何の準備もなしに出来てしまった。

しかしその後お目にかかった高木先生には鬚はなかったように思われ、記憶のそれはまぼろしの鬚であったか知らんという迷も出て、先生側近の森淳司教授に、高木先生の鬚についてお問合せしたものである。折返し頂いた御返事の要点を引用させて頂くと、

さて、高木先生のお鬚のことですが、私共の知っている限りでは（昭和二十二年以降六十才頃）、貯えておりません。今、名古屋の義妹さんにお電話申し上げましたら、若い頃（京城か九州の頃か？）には小さな鬚をつけておられた時もあったそうです。髪の方は六十才頃すでに白くきれいでした。その前は知りませんが、お染めになったこともおありのようです。「わが髪の色を感ぜつつバスを小高き高原に待つ」という一首を書かれた色紙を頂戴したことがございます。先生はなかなかのスタイリストで、ワイシャツはつけず、好みのよい色のシャツをつけておられましたことが思い出されます。……

この御返事で見ると、私が拝見した先生のお鬚は最後のものではあつたらしい。敗戦という現実には誰しも正直しを強要される結果となつたが、高木先生も九大教授を辞されたり、そして鬚をおとされたりしたのではなからうか。森教授はその再出発された鬚のない高木先生の木鐸を受けられたのである。しかし名著「吉野の鮎」への評価には戦前も戦後もなかつた。そこには上代文学研究に従うものの道が、はっきりと示されていたからである。

一

文学とは何を職能とするものであらうか。文学概論と名付けられた学問があつて、この間に答えるいろいろな言葉が用意されているが、文学の果すべき役割は人間の探求にあるとするのが、いちばん平明で要を得ていると思う。自然描写に生涯を捧げる作家もあるが、自然を美しと感じ、これを表現しようとするのはひとり人間のみである。「道のへの糧は馬に食はれけり」と芭蕉は吟じた。糧は馬にとつては腹を満す食糧にしかすぎない。糧花を美しとみ、その花の命の短きを嘆いて、糧花一朝の夢と観ずるのは人間のみであつて、それが文学である。八十氏河の網代にいざよう水に無常を感じるのも、楓の黄葉の散り過ぎたのを嘆くのも、人間人麿・黒人なればこそのである。人間とはまことによき生きものであり、生涯をかけて研究するに値すると思う。

この人間を描写するのに、作家はしばしばヒゲを用いる。文芸の素材研究はわれわれにとって閑却を許されぬ分野であるが、文芸が一人の人間を描写するのに、ヒゲはかなり重要な役割を占めていることに気がつく。第一次世界大戦の大立もの、ドイツ皇帝カイゼル・ウィルヘルムはびんとはね上ったカイゼル鬚によって象徴し得た

し、連合側の大立ものフランス大統領クレマンソーは虎鬚によって彼の人間像が描かれた。このようにわれわれは、作中人物のヒゲによって既にその人の人間性を想像し、しかも多くを謬たないのである。

わが若き兵の日よりぞ貯へし口鬚は何の象徴なりし

佐沢 波弦

と歌われているように、鬚には強い象徴性があるもの
ようである。

白鬚をうつむけて画面よぎるときシュバイツェル英雄
伝のしづかさ 馬場あき子

映画によって描かれた医聖シュバイツェルの白髯から受けた作者の感動が歌われている。シュバイツェルに仿する俳優は、まず何よりもその白髯を力としたに相違ない。シュバイツェルに化するための最有力な手段はおそらくその人のものに寸分違わぬ付髯を用いることであつた。映画によってシュバイツェルに近付くことの出来た作者も、白髯をよすがとしたのである。

硝子戸に病みほほけたる貌が映りキリストの如き髯が
ありけり 一刀 研二

これは作者自身の髭であるう。長く病んでその病み衰えた自らの顔に、病んでも死んでも伸びるという髯が、恰もキリストのそれにも似ているのを、硝子窓に映った

わが顔にみたのである。

色淡く花に埋れし父の顔死にたるのちも髭のびてをり

柳 等

もそれを歌っている。心臓をはじめ肉体のあらゆる機関は停止し、既に死が宣告されているのに、ひとりヒゲのみは人ごとのように生育を続けているとはどういうことなのであろう。枯木や岩石に生える苔と同じものなのである、とでもいうべきか。

きれぎれに暁がたの夢に見し君が髭のあはれ白しも

永井ふさ子

斎藤茂吉晩年の愛人、永井ふさ子が歌う茂吉の髭である。「あはれ白しも」としか歌えなかつた。

仰向けの顎をうづむる荒き鬚梅咲きしやと今朝は問ひ
給ふ 太田 青丘

この鬚は青丘博士の父君、歌誌「潮音」の主宰太田水穂の鬚である。故人は顎鬚を貯えており、私も見覚えていたのだが、病んで伸びるに任せてある鬚をここには令息が枕頭に待して、永訳の時の迫るを覚悟しつつ詠まれた伸び放題に伸びた父の鬚に胸迫る思がする。但しこの歌にはこうしたありのままの情景と、もう一つ臨終に近い大伴旅人^{かくのた}とが二重写しにされている。

455 如^{かくのた}是耳^{ありける}。有家^{ありける}類物^{もの}乎^や。芽^{はぎの}子^な花^な。咲^{さきて}而有^{ありやと}哉^や跡^{あと}。問^{とひし}之^ま君^ま波^は

母。(万・卷三)

余 明軍

病める旅人は資人明軍に「萩の花咲きてありや」と問うたが、水穂は青丘に「梅咲きしや」と問うたのである。作者は父からこう問われた時、反射的に万葉集のこの明軍の歌を想起し、この歌が出来たものと思う。ヒゲとは関りのない問題ではあるが、この歌を引用する以上は言及する必要がある。

最近貯えたばかりの宮柵二のヒゲに関してさえ、もう数首の歌を集め得た程で、現代短歌を瞥見しただけでも、ヒゲはなかなか重要な素材となっていることが判るが、これを文学の畑全体にひろげてみると、一層そのあなどり難い重要性を認めざるを得ない。

二

ヒゲという言葉の語源をまず知りたいのだが、大言海をみても「秀毛ノ意、或ハ、鬚毛ノ意トモ云フ」とあって、自ら語源中毒と称しておられた、御自分も刈込んだ鬚まで蓄えておられた大槻言海博士も、聊か自信なげなる書きぶりである。語源が判れば続いているいろいろなことが考えもされ、解けても来るのだが、今のところ如何ともし難い。漢字の世界では髭がくちひげ、髯(髯は俗字)はほおひげ、鬚はあごひげと区別されている。後述する

スサノヲノミコトの八束髭は、この三つの混ざった大ヒゲらしいから、一字ではあらわし難いが、口ひげの意味の髭が当てられたのはいささかまづかった。この八束髭に類型を求めると中国に鬣羽があつて、鬣羽鬣が彼の威容を扶け、鬼をも拉ぐ勢を示す。こうして八束髭——鬣羽型のヒゲは、英雄豪傑の象徴として画家や文人の用いるところとなる。神武天皇という人が実在したにしても、この種の鬣の持主であつたとする根拠は全くないにも関わらず、五月五日の節句に飾る神武像はすべてこの型の鬣を黒々と付けてある。日本武尊は英雄ではあつても、女装して賊を討つ美丈夫であつた故か、その画像には鬣はない。鬣は男のものである。

両方に鬣があるなり猫の恋

四方 太

と坂本四方太が興じたのは、人間なら鬣は男のみにあつて女にはなく、それでカップルが出来上るのに、猫には雄にも雌にも鬣がある。つまり人間とは違うところを興じたのである。こうして動物にも鬣があるから、前述クレマンソーの虎鬣もあるわけだが、昆虫の触角も魚の肉鬣も皆ヒゲと呼ばれている。想像の動物たる竜にまで鬣を添えたのは、鬣の功用をわきまえてのことである。人間がこれを逆用して天皇の鬣を竜髯と呼んだりする。ユリ科の多年生常緑草にリュウノヒゲのあるのは、その葉

の形状からの名である。竜虎は並び称せられるだけに、竜髯もあれば虎髯もあるということか。明治時代には官員といえば上から下まで鬚を蓄えて大いに威張ったので、民衆は彼等をナマズと呼んだ。鯨にはヒゲがあるからの陰語である。ということはヒゲには権威の象徴という一面があるのを物語る。そして民衆は面従腹背、しおらしげにお鬚の塵さえ払うのである。いづくも同じ、宋の寇準の故事が宋史に載っている。

初丁謂出_ニ準門_一。至_ニ参政_一事_ニ準_一甚謹。嘗會_ニ食中書_一、
焚汚_ニ準鬚_一、謂起徐_レ払_レ之。準笑曰、参政國大臣、乃為_ニ
官長_一、払_レ鬚邪。

ヒゲ食い反らして「おい、こら」とやられないためには、先きまわりしてもおヒゲの塵を払うべきであった。

近頃は青少年でヒゲを蓄えるものがにわか増大した。これは内容の空疎を覆おうとか何とか、風俗批評家がいうようなものではなく、一種のオシャレとみるのが正しいように思う。ヒゲにも稀少価値はあるのだが、今のように沢山あられてはどうにもなるまい。フィリッピンの島に戦後三十年を過ぎた横江、小野田、中村の三勇士は、ジャングルを出る時いずれもきれいにヒゲを剃って出て来た。三十年の原始人的生活はヒゲ剃によってはつきりけじめが付けられ、直ちに文化社会に身を投じ

て、さほどのたじろぎもみせないのである。人間と断絶して社会と交渉を失っていたこの人達には、ヒゲは生理に従って生えかつ伸びただけのことであって、遂に何の意味をも持ち得なかった。三氏とも惜し気もなく剃り落して出て来たのも道理である。よく見かけるアイヌ族の酋長のヒゲの如くんば、ヒゲこそ酋長そのものかと思われ、これなくては全くその貫録を喪う。

ヒゲはその所在、形状、色などによって種々の名称がある。口の上であれば上鬚、下であれば下鬚、併せて口鬚の名もある。頬であれば頬鬚、顎であれば顎鬚などいうのがそれである。形状による名称には、八字鬚・泥鰌鬚・鎌鬚・チョビ鬚・虎鬚・カイゼル鬚・天神鬚などがある。大体形を形容する名称で説明も不要であるが、天神鬚は天神さま菅原道真の画像にみられる鬚で、鬚の両尖端が内側に曲っている。阿佐太子の筆と伝える聖徳太子像にみられる鬚は、わが国上代貴族の鬚の典型と考えてよろしかろう。

夏目漱石の自画像をみると、ヒゲの両端がびんとはね上っていて、まがう方なきカイゼル鬚で、大正初年の頃ドイツ崇拜のわが国では大流行であった。漱石もその頃時流に随って、ヒゲの尖端をひねり上げていたのである。しかし類型のない独自のヒゲを育成して得意げな人

もあって、私がみたのでは大正期の長岡外史將軍のそれがあった。真白な豊かなヒゲをふっくらとふくらませ、しかも尖端は尖らせてあるのだが、実に丹精をこめて手入がしてあり、鹿鳴館ばりの馬車で東京市中を乗りまわしていたのは、まことに珍無類の風景で、ヒゲは恰も綿菓子のようにみえた。

色によるヒゲの名もさまざまである。私が小学校六年でお習したN先生は赤鬚という仇名の持主であった。髪はそれほどでもないのにヒゲは真赤なのである。こうして実在の人物にもあるにはあるが、それよりも仮作人物に多いのもおもしろい。山本周五郎の「赤ひげ診療譚」は、映画になり、テレビに放映されてかくれもない。作者が主人公を赤鬚にしたのは、この特異な人間像を描くための一手段であった。源氏物語の鬚黒右大臣は鬚黒きよっての名ではあるが、式部卿の女を娶って楨柱を生み、その妻の発狂により離婚して玉蔓を妻にする。政治の手腕があつて摂政に上る。紫式部はこの人物を鬚黒で象徴化している。白鬚には近江の白髭神社に祀られる白髭明神があり、脇能「白髭(鬚)」に作られる。ユキノシタ科の多年草にシラヒゲソウもあつて、茎の頂に白い五弁花を咲かせる。能面には白式尉があり、用途が広く、勿論白髭に作られる。シラヒゲソウは能からの連想による

命名であろうか。そして青髭はシャーロックホームズに先を越され、わが国の文学には登場しないが、歌舞伎で青隈に彩つて出る悪役の公卿を青公卿というのは関連がなくもない。そして「鎌髭」も「関羽」も歌舞伎十八番の中にあつて、歌舞伎と鬚の関係が密接なのは当然であろう。だが、私がここでみておきたいのは、古事記万葉の鬚である。

三

人類二百万年の歴史の前に、上代と近代との千数百年の時間の距離が果してどれだけの意義を持ち得るのであろうか。文学を時代別に研究するために、別世界でもあるかのように錯覚する危険もありそうである。髪でも鬚でも何んでもよい。一つを探り上げて上代から近代に至るまでを一貫してながめるような見方を、一方では怠ってならないのではなからうか。——と、こんなことを考へてのことである。

既に述べたように、日本文学史にあらわれる鬚男は押すな押すなと次々登場して来るが、記紀の世界、日本神話の中に最初に現れ、その鬚面にものをいわせ、われわれ後代の読者に奇想天外より落つるかと思はしめるのは、いうまでもなくスサノヲノミコトである。カグツチ

を生んで焼け死んだ妻イザナミノミコトを恋うるのあまり、黄泉国一穢き国を訪れたイザナギノミコトは、危く生還して日向の橘の小門の阿波岐原に到り襖袂をし、船戸神以下、辺津甲斐弁羅神に至る「身に著ける物を脱くに因りて生れる神」を生む。更に「上つ瀬は瀬速し。下つ瀬は瀬弱し。」と告り、中つ瀬に下りて濼ぎ、八十禍津日神以下諸々の神々を生み、続いて、

是に左の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、天照大御神、次に右の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、月読命、次に御鼻を洗ひたまふ時に、成れる神の名は建速須佐之男命。

とあって、待望の三貴子出現となり、アマテラスオホミカミは高天原を、ツキヨミノミコトは夜の食国を、ササノヲノミコトは海原を、それぞれ知らせと父命から任命される。然るに

故、各依さし賜ひし命の随に、知らし看す中に、速須佐之男命、命させし国を治らずて、八拳須心の前に至るまで、啼き伊佐知伎。伊より下の四字は音を以、
あよ。下は此れに效へ。其の泣く状は、青山は枯山の如く泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。是を以ちて悪しき神の音は、狭蟬如す皆満ち、万の物の妖悉に発りき。故、伊邪那岐大御神、速須佐之男命に詔りたまひしく、「何由かも汝は事依さ

せし国を治らずて、哭き伊佐知流」とのりたまひき。爾に答へ白ししく、「僕は妣の国根の堅州国に罷らむと欲ふ。故、哭くなり」とまをしき。爾に伊邪那岐大御神、大く忿怒りて詔りたまひしく、「然らば汝は此の国に住むべからず」とのりたまひて、乃ち神夜良比爾夜良比賜ひき。夜より以下の七字
は音を以るよ。故、其伊邪那岐大神は、淡海の多賀に坐すなり。

以上は鬚を対照として考察するためには、引用せざるを得ない古事記の記載である。

三貴子とはいえ、アマテラスオホミカミとツキヨミノミコトは左右の目から生れ、ササノヲノミコトのみは鼻から生れていて、自ら尊卑の別が暗示されている。「目糞鼻糞を笑う」という諺もないではないが、万葉人が「君が目を欲る」と歌うように、目は心の窓でもある。

日月は世界いづれの神話でも最も高貴な神格を与えられているが、これが天界の昼夜を統べるのは当然の配役であろう。鼻というのは語源的にはもの突出している部分を目指すハナで、端も花もすべて同一語源に出ると思われるが、鼻目秀麗などいいながらも目よりも下の印象を与え、品下る感じを与える。嗅覚が動物的感觉と考えられ、文芸の世界でも滑稽素材として扱われる場合が少くない。ゴリーキイの「鼻」、芥川竜之介の「鼻」、い

ずれもこの問題と関り合う。スサノヲノミコトが下界の海を知らせと命ぜられるのは、鼻から生れた宿命であったかも知れぬが、当人はそれよりもっと人間臭い妣の国根の堅州国、地上に王たらんことを望むのである。地上は生きとし生くるものが必ず死なねばならぬ穢き国であるが、イザナミノミコトはここに居る。そこはスサノヲノミコトにとってはマザーランドである。

かくして海原を知らせとの父命に背き、スサノヲノミコトは「八拳須心の前に至るまで」泣き続ける。この英雄の風貌を物語るうとして、神話の語り手は「八拳須」を以てした。その意味は八つかみもある長大な鬚を胸元に垂れる大丈夫となりながら、ただ泣きに哭いているというのである。「泣く子なす」と万葉集が歌うように泣くのは小児の所業である。それを胸さを覆う八拳鬚を生す大丈夫が、小児のように泣き続けるのであるが、青山を泣き枯し、河海を泣き乾すという大泣きは、小児輩のなし得る業ではなく、八拳鬚の大丈夫なればこそである。近松描く心中者二人の涙でさえ「川の水量やまさるらん」というのだが、それにも幾十万倍する鬚男の大泣きである。神話なればこそその有難さというべきか。ともあれ、こうして高天原系と出雲系との対立が、スサノヲノミコトの天上追放によって暗示され、さらに天真名井

の誓約や、八岐大蛇退治の話が続いて、大国主命に跡目を譲るまで、豪華な神話絵巻を繰り拡げるのである。しかしここではヒゲから離れては脱線になる。鬚髯考と題して書き始めた筈である。

この八拳鬚というすさまじいヒゲも、実はスサノヲノミコトの独占ではなかった。彼の外にまだ二人あったのである。その一人は垂仁天皇の皇子本牟知和氣王である。天皇の後沙本毘売は実兄沙本毘古王と通じており、王は毘売に、天皇を弑させようとするが毘売は果さず、兄の許に走る。毘売は既に皇子を懐妊しており、これを産んでから天皇に返す。これが本牟智和氣王である。

然るに是の御子、八拳鬚心の前に至るまで眞事登波受。此の三字は音を以るよ。故、今高往く鵠の音を聞きて、始めて阿芸登比阿より下の四字は音を以るよ。為たまひき。

さてこの子は、スサノヲノミコト同様、「八拳鬚心の前に至るまで」全く物がいえないのである。この皇子決して英雄でも豪傑でもない、しかも啞者であった。

八拳鬚はスサノヲノミコトには似合うようだが、それは後のことで大人になるまで泣きわめいていたのだから、実はその鬚はない方がましであった。本牟知和氣王は啞者であったが、鵠の声を聞いて始めて顎をばくばくして音声を出したという人物である。天皇がこの

ことを憂えて寝ると夢に、「我が宮を天皇の御舎の如修理めたまはば、御子必ず真事登波牟」というお告げがあつて、占うとこの祟は出雲の大神の御心と知れたので、皇子を出雲に詣らせると口がきけるようになり、また肥長比売という蛇身の美女と交り、日高川伝説の原型のような話を遣した。出雲の祖神ササノヲノミコトと祟を蒙るこの皇子とが、同じ八拳鬚なのは注意されてよかるう。

ところがもう一人、この八拳鬚と唾とをかけもつ人物がある。出雲風土記仁多郡三津郷のところにみえる阿遲須伎高日子命である。

三津郷。那家西南廿五里。大神大穴持命。御子阿遲須
高日子命。御須髮八握于生。屋夜哭坐之。辭不通。爾
時。祖命。御子乘船而率巡八十嶋。一字良加志給。輓
猶不止哭之。大神夢。願給。告御子之哭由。夢爾
願坐。則夜夢。見坐之御子之辭通。則寤問給。爾時御津
申。爾時何処然云。問給。即御祖前。立去於坐而。
石川度。坂上至。留。申。是処一也。爾時其津水沼於而。
御身沐浴坐。故國。造神吉事。奏。參。向朝廷。時。其
水沼出而用初也。依。此。今。産婦。彼村。稻不食。若
有。食者。所。生子。已。云也。故云三津。神龜三年。即。有
正倉一。

今度は大穴持命の子なのだから、ササノヲノミコトには孫になる。八拳鬚が似ることもあるうが、ササノヲノミコトは哭いてばかりはいても唾ではなかつた。本牟智和氣王はその出雲大神の祟によって、八拳鬚を生やしなからものがいえなかつた。わがために天皇と同じ御殿を建てれば唾は直るといふ。出雲系の天孫系への宿怨ともみえようか。この皇子が交つたという肥長比売は蛇身であつて、大物主神を想起せしめ、これも出雲系の執念かも知れない。清姫さながら、蛇体をあらわして皇子を追うのである。ササノヲノミコトは豪快で、紅葉の金色夜叉を明るくする荒尾讓介や、露伴の髭男或は漫画の荒熊サン、一頃の応援団長風俗にも通ずるものを持つているが、あと二人の八拳鬚は甚だ暗い。しかしこの三者がいずれも出雲と関係のある点は共通でもあるし、注意すべき点でもある。例せばむかしの信濃人はむかしの越後人に対してあばら骨が一本足りないやと軽侮したが、そのような軽侮を高天原系の人々が出雲系の人々に加え、出雲系の人々は高天原系の人々に対等を要求して、出雲の神が天皇と同じ宮殿を建てよと迫つて祟をなすというやうな伝承の根柢をなしているやに思う。二大勢力の抗争は長く続いたであろうが、皇統譜にみる七代孝靈の名は大倭根日子賦斗邇命、八代孝元の名は大倭根日子子国玖

琉命、九代開化の名は若倭根子日子大毘毘命と古事記は記録し、これらの名にみる根子は出雲系の統治者を、日子は高天原系の統治者を意味すると考えてみるならば、両系が大倭の名の下に統合されたことを示すものではあるまいか。八拳鬚心の前に至るまで、妣の国根の堅州国に罷らんと望んで哭き続けたササノヲノミコトこそまさに根子であり、その継承者達はまた根子であった。高天原系の支配者が日子と呼ばれることに就いては、今日まで日の御子と皇太子を呼びならつてゐる通りで、改めて考察する要もあるまい。この七、八、九、三代の天皇の名は、恰も大ブリテンの皇帝がイングリランド国王とスコットランド国王とを兼ねるのに似た根子日子なのである。

四

鬚は勇武の人を修飾するにも用いられた。ササノヲノミコトものちには八岐大蛇を退治する武勇絶倫の人でもあった。近代の文学では前にも触れた幸田露伴の「ひげ男」があつて、ササノヲノミコトを連想させる風貌をそなえている。この作品は、武田対徳川・織田の長篠合戦を舞台にとり、武田方の勇将笠井大六郎高英の義勇を描いたもので、血あり涙ある露伴理想の男性像が描かれ、そのためにこそ鬚が用いられている。明治文壇一方の大

作家、紅露時代を作つた尾崎紅葉はその代表作金色夜叉の主人公貫一の親友荒尾護介を鬚男として描いた。つまり明治の二大家紅葉露伴は誠心誠意の人を描くのに鬚を利用したのである。しかし金色夜叉の荒尾の役割は、暗過ぎるこの小説に明るみを添える役割でもある。つまり笑の要素ともなつてゐるのである。そこで鬚が笑に利用される一例をも挙げておく。狂言に髭櫓がある。下京の住人で大髭を誇る男が大嘗会の犀の鉾の役に扱ばれ、女房に鬚の掃除を命ずるが、女房は絶対反対、むしろこの機会に亭主自慢の鬚を切り落してしまおうと、近所合壁の女房どもを味方につけて攻め寄せる。鬚男は垣立櫓まで設けてここを先途と応戦するが、遂に櫓を引落され、さしもの大鬚もあえなく大毛抜で抜かれてしまふという結末である。もう一例を添えれば歌舞伎十八番に鎌髭があつた。廻国修行者にやつした快哲なる人物、実は平景清が接待宿に宿つてゐると、鍛冶屋四郎兵衛こと実三保谷四郎国俊とあう。三保谷は鬚剃にかこつけて景清の首を搔こうとするが相手は不死身で切れないという馬鹿げた筋で、その馬鹿げた鍛引のすげかえ方がおもしろく、鎌で鬚を剃るといふ不釣合が一層興を添えもする。こうして鬚と笑という宿縁は、文学の世界で永久に続くことであろうが、ここでは古事記に続き万葉集の鬚

を考察してみたい。そこには笑の鬚、貧相をあらわす鬚、老を語る鬚などがあつた。

まず鬚そのものが主要素材をなしている作といへば、
いうまでもなく三八三五番歌である。
3835 勝間田之。池者我知。蓮無。然言君之。鬚無如之。

右或有聞之曰。新田部親王出遊干堵裏、仰見
勝間田之池、感緒御心之中、還自彼池、不忍
愛。於時語婦人曰、今日遊行見勝間田池、水影
漣々蓮花灼々、何怜断腸不可得言、爾乃婦人作此
戯歌一專輒吟詠也。

まず左註から読んでみる。右の歌についてこんなことを聞いている。新田部親王が都内へお出かけになり、勝間田池を御覧になつて、御心中に深く感動され、かの池から還られてもその風景が堪らぬお気に召し方で、時に一婦人に語つていわれるには、今日勝間田池に出かけて見物したが、池水が漣々とし、蓮花が咲き盛り、ただもう何といふようなないほどだという、賞め方の大げさなのに、かの婦人がこの戯れの歌を作つて吟詠したのとこのことです、というのである。

新田部親王は天武第七皇子、生母は藤原五百重娘。神
龜元年（七二四）二月一品となり、天平三年（七三一）十一月畿内大惣管に任じ、同七年（七三五）九月に薨じた。

集中作品をみないが、柿本人麿とも近かつたこの人に、歌作なしとは考えられない。

柿本朝臣人麻呂獻新田部皇子歌一首并短歌
261 八隅知之。吾大王。高輝。日之皇子。茂座。大殿於
ひさたの。あまつひくる。ゆきしもの。ゆきよひつづ。いやとよませ
久方。天伝来。白雪仕物。往來乍。益及常世。

反歌一首
262 矢釣山。木立不見。落乱。雪。朝。楽毛。

皇子の御殿が飛鳥の八釣にあつた。そこに雪の降つた時、人麿が祝福して献じた歌であらう。雪はいつも目出度いものとして歌われている。それはそれとして、天武の第七皇子で一品親王となつた尊貴の上もないこの人に、右記のような逸話があり、侍女の一人にあざやかな一本をとられたのである。歌は「勝間田の池に蓮のないことを私はよく知っております。そうおっしゃるあなた様に鬚がないのと同じです」という。全く裏返しに歌つたところが、戯歌の戯歌たる所以である。勝間田池は都内にあつて、知られた蓮の名所であつた筈、都民にはみなれたその風致であつた。ところが一品親王ともなれば気軽に外出も出来ぬからか、親王はその有名な蓮の名所を今度始めて遊覧した。始めてだったからその美に打たれて帰る、侍女にその美を語つたのだが、もう何度もみている婦人には親王の大げさな賞め方がおかしかつた。

親王は大鬚の持主であった。僧侶は鬚を剃ったが普通の男子は鬚を蓄えるものが多かった。殊に高貴な人は、その顔を尊厳にするために大かれ少かれ鬚を蓄えた。阿佐太子面がくと伝える聖徳太子も鬚を蓄えているが、これは当時の貴族の風俗として典型的なものである。歌仙絵その他貴族の風貌を伝える画像は、平安朝以後のものしか伝わらないが、それらの画像も多くは鬚を描いている。新田部親王に鬚なしと断ずることは、風俗史的に不可能ではないかと思う。

然るに代匠記は、

伝ノ意ニ依ルニ、彼池ニ蓮ハナカリケルヲ、蓮花灼ミタリトノタマヘバ、我ヨク彼池ノ蓮アルベクモナキ事ハ知參ラセテサブラフ。ナアザムカセタマヒソ。然ノタマフ君ノ鬚オハシマスベキ御顔ニナキガ如クニテ候ト戯タルナリ。此親王ニハ鬚ノオハシマサザリケルナルベシ。

と主張し、万葉集注釈もこれを踏襲してか「親王には鬚が無かったと見る方が当たっていると私は思ふのである。」とされた。しかし私には、それは風俗史的に僧侶ならぬ親王にはあり得ぬことと思われる。親王は希代の大鬚で、勝間田の池面を覆う蓮花のように頬を埋めていたのであろう。蓮恋の洒落で、親王が婦人に言い寄り、婦人

が婉曲にことわったのだという見方も、例の遊仙窟を引用して説かれているが、これも考え過ぎではなからうか。大鬚を笑った歌とのみみる時、この歌は生々して来る。鬚自身、笑の因子を持つこと既に述べた通りである。三十六歌仙絵は、制作は鎌倉時代に下るのであろうが、僧侶や女性を除けば大部分の顔に鬚が描かれ、家持や業平の像にも勿論鬚がある。鬚の描かれてないのは敦忠・高光・仲文の三名のみで、他はことごとく聖徳太子流の薄鬚が描かれていて、典拠あつての画像ではないにしても、貴族男性の風俗としてこの種の鬚を蓄えるのが常識であつたことを物語る。天武の皇子一品新田部親王が頬を埋める大鬚を蓄えていれば、異彩を放つものであつたろう。普通の鬚ならば、当然あるべきものとして歌にも詠まれなかつたであらうが、異彩を放つものであつたればこそ、勝間田の池の夥しい蓮華と対比されたのであろう。そして鬚は笑の種となることを前にも述べたが、親王の鬚もまた戯歌の種となつたのである。

戲囃僧歌一首

3846 法師等之。鬚乃剃杭。馬繫。痛勿引曾。僧半甘。

法師報歌一首

3847 檀越也。然勿言。五十戸長我。課役徵者。汝半甘。

万葉集の鬚と笑はこうしてなお続く。僧が鬚髪を剃り除

くこと既に天智紀大津皇子の出家の条にもみえるが、今日に至るまで変らない。しかし毛髪というものはたえず伸びるもので、何時も綺麗に剃っておくには、毎日の日課としてせねばならない。その剃った鬚の伸びて荒々しく生えたのを、太さを誇張して剃杭といい、馬を繋ぐ杭になぞらえ、繋がれた馬があげられたら法師は痛い痛いと泣きわめこう、馬よ、あんまり強く引くでないぞ、というのである。僧をからかう毒のない戯歌で、万葉らしい淡泊さの掬すべきものがある。僧はこの檀越に応酬して、檀那さま、そうおっしゃるな、里長の課役の徴収にはあなたもお泣きなさるうに、と一矢酬いた。次の憶良作貧窮問答歌に描かれたように、里長の課役の督促は答を以てするきびしいものであったからである。そして同じ課役の苦痛がこの歌では極めて明るく描かれ、憶良によつては最も暗く描かれている。ここには鬚に関わることのみを語らねばならないが、後世いうところの貧乏鬚が貧窮問答歌第一の貧人を描くに用いられた点を注視したい。

892 風雉。雨布流欲乃。雨雉。雪布流欲波。為部母奈久。
寒之安礼婆。堅塩乎。取都豆之呂比。糟湯酒。宇知須
々呂比豆。之巨夫可比。鼻毗之毗之爾。志可登阿良農。
比宣可伎撫而。安礼乎於伎豆。人者安良自等。富己呂

倍騰。寒之安礼婆。麻被。引可賀布利。布可多衣。安里能許等其等。伎曾倍騰毛。寒夜須良乎。……

われよりも貧しき人に問いかける第一の貧人の貧乏ぶりを憶良はこのように形容している。この貧士は辛うじて飢と寒さを凌ぐべき糟湯酒や麻衾・布肩衣を持っている。しかも「吾をおきて人はあらじ」というほどの矜持を喪つてはいない。それだけに彼は失意の人である。辛うじて生き継ぐに過ぎない薄幸を痛嘆するのだが、彼の貧相を形容するのに憶良は「しかとあらぬ鬚」を用いた。鬚は男性の顔に威厳を加える役割をもつこと前述の通りであるが、その鬚が貧弱な薄鬚である場合は反って貧相にする逆効果を生む。貧乏鬚の名のある所以で、憶良はこれを用いて第一の貧人を描こうとした。遣唐使粟田真人一行の随員に加えられ渡唐する以前の憶良を、この貧人の風貌にみるような趣があり、自己を漫画化したともみえる描写である。その貧乏鬚をかき撫でるところに、矜持の巧みな表現があつて、「吾をおきて人はあらじ」に続くのが如何にも妙である。この誇高き男が、誇を現すために立てた鬚であつた筈にも関らず、反つて彼を貧相にみせ、第二の貧人を呼び出して、貧を語るにふさわしい風貌が出来上つた。

万葉集の鬚についてもう一つみておこう。家持作防人

悲別歌にみえる鬚である。

陳_二防人悲別之情_一歌一首并短歌

4408 大王乃。麻氣乃麻爾。嶋守爾。和我多知久礼婆。

波_レ蘇婆能。波_レ能美許等波。美母乃須蘇。都美安氣
可伎奈塗。知_レ能未乃。知_レ能美許等波。多久頭努能。
之良比氣乃字倍由。奈美太奈利。奈氣伎乃多波久。：

とあるのがそれである。防人にいで立つわが子を、母なる人は衣の裾を摘み上げて撫で、父なる人は、白鬚を涙に濡らして別れを嘆く。老いたる父を描くのに白鬚が用いられているのである。庶民層でも人の親たる男性に白鬚を蓄えることが共通の風俗であったればこそ、作者は白鬚を以て老父を修飾した。

貴族も士民も階層の如何を問わず、僧侶の外は蓄鬚の風があつことを、これら万葉集の作例が示している。白鬚とここに歌ったのは父なる人の老を示すためで、能の尉面が白鬚をもつと同様である。白式尉と呼ばれる能面には皺と鬚とがあり、慈愛を湛えた笑みの顔に作られている。豊かな経験による、若い者を導くに足る知恵が内蔵され、慈愛の目を細めて笑むのである。それは人間の上に立つ神に近付いた人間最高の境地であり、目にみえぬ筈の神を象るのにこの面を以てするのも道理であ

る。さて防人の母は裳の裾を摘み上げてわが子を撫で、その父は白鬚を涙に濡らして、朝戸出の愛しき吾子を送るのである。

これは平凡な家庭の「父」を、防人を手に持つ状況の中において家持が描いたものである。その父なる人を描くのに、家持が白鬚を用いたことをここでは注意するのである。この防人の父の風貌は、尉面の原型というに近からう。歌舞伎の世界では、髭の意林や一条大蔵卿の登場もあって、このよき父のイメージのみに白鬚を固定するわけにはゆかぬのが残念である。

さてまた、ササノヲノミコトは天上を逐われるに當つて、「於_レ是八百万神共議而、於_二速須佐之男命_一、負_二千位置戸_一、亦切髻及手足爪令拔(袂・袂)而、神夜良比夜良比岐」と古事記は記し、千位置戸を負わしめ、例の八拳髻と手足の爪を切られたとある。この原文に両様あって伊勢系諸本には抜(袂はその代用字)とあり、ヌクとハラフの差を生ずる。ハラフを採ればこの訓みは「亦髭を切り、手足の爪を抜かしめて」と古事記が訓んだものと異なり、「亦髭と手足の爪を切り、被へしめて」となる。

次田潤氏の古事記新講も、尾崎暢殃氏の全講も、そう訓んであるし、西郷信綱氏の論文「ササノヲの鬚」(『日本文学』1973)にも被を可としてあり、私もこの説を採

りたい。髭を切り、爪を抜かれ、そして被えして、神やらひにやられたのである。髭はこの英雄の顔になくはならぬものであったのだし、蓄鬚の風は後代まで存続する。

壬申の乱を前に僧となつて吉野に入る大海人皇子を書紀は「剃鬚髮、為沙門」と記し、髭なきは僧のみであったことを裏書するものようだし、源氏物語絵巻に登場する優男達も、光源氏をはじめとして皆髭を蓄えてゐることは、既に西郷論文にも指摘されたが、歌仙絵についても同じ事実のみられることは前に述べた。万葉の時代には僧侶が髭剃を怠るさへ、既に一般人には異様とみえたので剃杭の歌が詠まれ、新田部親王の髭は度を超えたが故に、勝間田の池の蓮になぞらえられたのである。髭のない一品親王を考えるわけにはゆかない。生来鬚の薄い者も無理にも鬚を立てたから、貧窮問答歌の「しか

とあらぬ」貧乏鬚もあったのである。

五

記紀万葉にみえる鬚髯を中心に、中近世近代にも目を走らせて「ヒゲの歩み」の跡をみて来た。鬚は切っても剃っても痛みを感じず、引抜く時だけ皮膚に苦痛を与え、死者の鬚さえ伸びるといふ、まことに宿木のような存在なのだが、文字以前、男性はこれで自己を表現し、象徴的效果を収めて来たし、従つてその育成に努めて来たものようである。古来の文学もまた、その人を描くのに、その鬚を有力な素材として利用した。詩歌も小説も演劇も、一個の男性を描き出すのに、鬚を十分に活用したのである。「鬚髯考」の必要を感じた所以もそこにあったが、読み返して甚だ意に満たぬものとなった。読者の御寛怒を乞うのみである。(五〇・三・二二)